

「羊とヤギ」の「羊」とは誰ですか

マタイ24, 25章のいわゆる「最後の審判」として知られる、預言の流れを整理してみると、「終わりが近づいたしるし」「臨在時の出来事」「いちじくの例え」「盗人の例え」「奴隷の例え」「10人の処女の例え」「タラントの例え」「全ての民の選別(これは例え話ではない)場面を整理すると、5つのたとえ話が挿入されていますが、締めくくりの人類選別の話は、臨在時の場面に戻って継続していることが分かります。

(マタイ 24:30) …人の子が力と大いなる栄光を伴い、天の雲に乗って来るのを見るでしょう…

(マタイ 25:31 - 32) …「人の子がその栄光のうちに到来し、またすべてのみ使いが彼と共に〔到来する〕と、そのとき彼は自分の栄光の座に座ります。そして、すべての国の民が彼の前に集められ、彼は、羊飼いが羊をやぎから分けるように、人をひとりひとり分けます。」

さて「誰がここで裁かれているか」ということについてですが、「すべての国の民」と言うことですから、全人類です。ではクリスチャンはここに含まれるのでしょうか。

クリスチャンが羊として右に、クリスチャンでない人がヤギとして左に分けられると言うことでしょうか。

分ける根拠として挙げられているものは、クリスチャン的な愛ある振る舞いですが、本来クリスチャンに求められている本質的なもの、例えば「信仰」「崇拜」「忠実」といった直接霊的な事柄は何ら問われていません。

さらに、羊とされたのがクリスチャンであるなら、当然終末期にキリストによってこうした裁きに合うことは周知のはずですが、聖句にある彼らには、まったくその認識がありません。羊として自分が分けられた理由さえ把握していないのです。

(マタイ 25:37 - 39) …義なる者たちはこう答えるでしょう。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えておられるのを見て・・・いつわたしたちは、あなたがよそからの人であるのを見て温かく迎えたり、・・・いつわたしたちは、あなたが病気であったり獄におられたりするのを見てみもとに参りましたか』。

彼らは自分がキリストに対して何らかの善行をしたと告げられたのはまったく意外なことでした。

そしてさらに、この言葉に対するイエスの言葉からも、ここにクリスチャンが含まれているかどうか分かります。

(マタイ 25:40) …わたしの兄弟のうち最も小さな者の一人にしたのは、それだけわたしに対してしたのです…

「わたしの兄弟のうち最も小さな者」とは誰でしょうか？

(マタイ 10:42) …弟子であるということによってこれら小さな者の一人にほんの一杯の冷たい飲み水を与える者がだれであっても、あなた方に真実に言いますが、その者は自分の報いを決して失わないでしょう…

「わたしの兄弟のうち最も小さな者」つまり、「その辺にいる名もなき一クリスチャン」という感じですが、ともかくそれは「弟子」でありクリスチャンのことです。羊として選ばれた人がクリスチャンならば、その全員が「キリストの兄弟の中の小さな者のひとり」です。極端な言い方をすれば、自分で自分に善行を施せば、「わたしの兄弟のうち最も小さな者の一人」に善行を施したことになるのです。

このようなことから、ここで裁かれる「全ての国民」はクリスチャンを除く全ての民であるということです。

3時半の間 聖なる者たちは獣の手に渡されます。

その同じ期間、「二人の証人」は全世界に向けたメッセージを送ることになっています。

この時までには、すでに、真のクリスチャンは比喩的に「集められている」、つまり誰がクリスチャンなのかがある程度分かるようになっていいると考えられます。

何故かと言うと、一般人から見ても実際に、彼らの手や額には野獣のしるしがありませんし、獣を崇拜しようとしないので否応なく目に留まるでしょう。当然、迫害、嫌がらせ等は日常茶飯事でしょうし、生活に不可欠な「売り買い」すらできない状況ですので、文字通りこのことが続くなら、生き続けるのは困難でしょう。

この時彼らが「守られる」という約束、あるいは保証は具体的にどのようなになされるのでしょうか。もちろん、この時点では神の介入が始まっているので、奇跡的にということもあり得ると思いますが、むしろ、一般の人々（クリスチャンでない人々）が、それらクリスチャンの窮状を見て、食物を渡したり、病気の世話をしたりなどの人道的な行為（うっかりすれば、それによって自分も非国民扱いされてしまうリスクを承知の上で）によって「守られる」ことがなされると考えられます。

正に、そうした時期にどのようなリアクションを取ったかに基づいて「羊」か「ヤギ」かに分けられる根拠を諸国民は自ら提出することになる。というのではないかと考えられます。

とりわけ、左に分けられた人々は、永遠の切断に入ると言われています。

それらの人は、目の前にいるのがクリスチャンであるというだけで、憎しみ、敵意を持ち、あるいはどれほど苦痛や困難な姿を目の前にしても、「自業自得」だと言わんばかりに無関心で、明らかに人間性が破壊された人々なのでしょう。

では右にいる祝福された人々が受け継ぐ「王国」とはどういうことでしょうか？

彼らはクリスチャンではないので、天の王国を受け継ぐ、キリスト共に王として支配する者として天に入ることにはあり得ないでしょう。

おそらくこれは、王国の支配の下に生き残って、「永遠に続く命にいたる」祝福を受け継ぐということなのでしょう。

これら、クリスチャンではない「羊」の人々に関する記述はマタイ以外からは見いだされないようですが、一つだけ、啓示の書の中に、関連があると思える不思議な記述があるので、ここで取り上げてみたいと思います。

それは、聖徒たちが「3時半」の間、迫害され、同時にその間に2人の証人が証の業を行う期間ですが、その期間の終わりに、ついに「獣」によって「殺される」こととなります。これら「2人の証人」は全てのクリスチャンを表していると思われませんが、「2人の証人」についての論議は、別資料「No.63 [二人の証人]とは誰ですか」をご覧ください
その後の記述に注目したいと思います。

(啓示 11:7,11-13)「彼らが自分たちの証しを終えた時、底知れぬ深みから上る野獣が彼らと戦い、彼らを征服して殺すであろう。

それから三日半の後、神からの命の霊が彼らに入り、彼らは自分の足で立ち上がった。そのため、大いなる恐れが彼らを見ている者たちに臨んだ。そして彼らは、天から出る大きな声が、「ここに上って来なさい」^{*}と自分たちに言うのを聞いた。それで彼らは、雲のうちにあって天へ上って行き、敵たちは彼らを見た。そして、その時刻に大きな地震が起こり、その都市の十分の一が倒れた。また、七千人の人がその地震によって殺され、そのほかの者たちは恐れ驚いて天の神に栄光を帰した」

(^{*}これは、その前に、3日反の後地上で、「命の霊が与えられ」ているので、「天に復活する」と言うことではありません。また、彼らは文字通り「殺された」のではなく、彼らの「証しする」という活動が停止させられ、完全に「野獣」の管理下に置かれたということだと考えられます。それで、「ここに上って来なさい」という天からの声こそが、いわゆる「携挙」と言われている出来事であろうと考えられます。

(テサロニケ第一 4:17)「…生き残っているわたしたち生きている者が、彼らと共に、雲のうちに取り去られて空中で主に会い、こうしてわたしたちは、常に主と共にいることになるのです。」

(コリント第一 15:51-52)「…わたしたちはみな死の眠りにつくのではありませんが、わたしたちはみな変えられるのです。一瞬に、またたくまに、最後のラッパの間にです。」

この時点で（神から見た霊的な状態という意味で）どんな種類の人々が地上に存在しているかと言うと、先ず「クリスチャン」そして、野獣の勢力と、野獣の崇拝者（彼らは、「2証人が殺されたことで歓喜し、贈り物を交換し合うと書かれています。）

つまり、神に対する態度のはっきりした2種類の人がいるワケですが、不思議なのはその後です。「天に昇って行く」のを「見ている者たち」がおり、それを見て大きな恐れを感じた人々です。そして、その直後の大地震で7000人が殺されるのですが、「その他の者たちは恐れ驚いて天の神に栄光を帰した」ということです。

これはどういうことでしょうか。度重なる、災いにも、災厄にも悔い改めず、最後の最後に至まで、「反キリスト」であることを示し続けた者たちが、いきなり7000人の例外を除いて、その他の残り全員が神に栄光を帰すようなことがあるのでしょうか。もしそうなら、その後のハルマゲドンで滅ぼされる人は誰もいないことになりそうです。

ですから、この「その他の者たち」というのは「クリスチャンをみている者たち」のうちの、

地震で殺された人たち以外の残りの人々ということでしょう。

彼らはどんな立場なのでしょう。クリスチャンでもなく、反キリスト側でもない人々です。恐らく彼らは、クリスチャンたち（私の兄弟たち）に関心を払い、気遣いを示し、あるいは心に留めていたので、彼らが殺された後、3日半の間放置されて誰も顧みない中で、たまたま偶然に「携挙」を見かけたということではないでしょう。

むしろ彼らは、悲しみや、混乱や不可解な思いで、3日半ずうっと、見守っていたがためにクリスチャンの携挙を目撃する機会にあずかったのでしょう。その後その人々について何も記されていません。

しかし、啓示19章の記録をみて見ますと、その人々の将来を暗示すると思える記述を見いだせます。

最終の裁き主であるイエスは、その口から出た剣で王たちとその軍勢を滅ぼすだけでなく、「諸国民を鉄の杖で牧する」こともされると書かれています。キリストはこの時点でどこにいる諸国民を牧するのでしょうか。

野獣とその軍勢は、裁かれて、滅ぼされるのであって、「牧される」ことはありません。それで、右に分けられる「羊」が啓示の中で「諸国民」と呼ばれている人々でしょう。

クリスチャンでない人々が千年王国の地に生きる見込みについては、別の資料「来るべき千年王国の下に地上にいる人々」をご覧ください。